

TILL THE END
CHAPTER : 3

シロとクロ

text by hatsun

たぶんシロは父の帰りを待っている。

紫に変色した長い舌を丸め、荒い呼吸は、横たわる体全体を大きく揺らしていた。落ち着かない眼球は、僕と母の顔を交互に見ている。

十年前、父が軒先に作ったシロ専用のスペース。縦に四畳ほどあるウッドデッキ。それを覆うように突き出たトタン屋根。ウッドデッキの角には家族3人で手作りした犬小屋が置かれている。屋根の色を何色にするかで3人の意見が分かれたあの日を思い出す。あの時も結局は僕の希望が通った。今はすっかりくすんでしまったオレンジ色の屋根をした犬小屋。その中で、今、シロが死を迎えようとしている。

僕は、これから生まれて初めて味わうだろう、身近な死、に対して、それを受け入れられる気が全くなかった。正確には、シロが死んでしまうという不安より、シロの死を受けて、自分の感情がどうなってしまうのか、という不安のほうが強いのだと感じていた。隣に並んでしゃがみこむ母は、無言で必死に涙をこら

えている。その姿は、今から僕が初めて経験することになる心の痛みを悲しんでいるようにも見えた。

なぜだろう、僕の頭の中で、カーペンターズの『イエスタデイ・ワンス・モア』が流れ始めた。

* * *

シロは雑種とは思えないほど、賢く凛々しい犬だった。

シロがこの家に来たのは、当時、小学一年生だった僕の一言が決め手だ。

「兄弟だっついていないんだから犬飼ってもいいじゃん」

きっかけは近所に住む同じクラスの友人、けいすけが子犬を飼いはじめたことだった。学校帰りに寄ったけいすけの家で見せてもらったその子犬は、クロという名前の柴犬だった。名前の通り、体は全体的に黒毛なのだが、目の上に眉のよ

うな丸い柄があったり、口周りや胸に白毛が入っている、とても可愛い子だった。柴犬と言ったら赤毛のイメージしかなかった僕は、こんな可愛い子犬がいるのかと興奮し、けいすけのことがうらやましくてうらやましくてたまらなかった。

それから一週間、僕は父と母に犬を飼いたいと毎日言い続けた。三日目には僕のしつこさに負け、母は僕の味方になってくれた。しかし父はなかなか首を縦には振らない。犬という命あるものを迎えること、世話をして育てていくという覚悟や大変さを繰り返した。だから本当は僕にその覚悟を感じさせるまでは首を縦に振るつもりはなかったはずだ。

しかし、その前に僕は伝家の宝刀を抜いた。

「兄弟だつていないんだから犬飼ってもいいじゃん」

僕は一人っ子だった。

当時、僕の学年、全五クラス、二〇〇名の中でも、一人っ子は三人しかいなかった。父はもちろん、何より母はそのことをひどく気にしていることを、僕は

わかっていた。

伝家の宝刀を抜いたちようど一週間後、父が子犬を連れて帰ってきた。タイムングよく、父の仕事で付き合いのあるお茶工場で飼われていた雌犬が、子犬を五頭産み、もらい手を捜していたのだ。

「雄一郎！ おとうさんが今から子犬を連れて帰ってくるって！」

受話器を置いた母が振り向きながら言った。

「ほんとに!？」

僕は熱中していた少年ジャンプを勢いよく閉じ、座ったままガッツポーズをした。あれ？ ガッツポーズなんて生まれて初めてしたかも？ と一瞬思ったが、それもすぐにどうでもいいと思った。

それから間もなくして、桜の花びらをワイパーに挟んだ、父のワンボックスカーが駐車場に入ってきた。僕は急いで軒先から外に出た。母の足音も後ろから

ついでくる。

いつもの紺色のつなぎを着た父が、両手にダンボールを抱えて運転席から降りてきた。運ばれるダンボールから、白い子犬が顔を出した。首を左右にキョロキョロさせながら父といっしょに近づいてくる。

「柴犬と野良犬の雑種だけどな、五頭いた中から最初に選ばせてもらって、いちばんかしこくて可愛いオスをもらってきた」

父は誇らしげに言った。

白い子犬は落ち着かない様子で、ダンボールをクンクン嗅いだり、父の顔を見上げたり、僕の顔を見て首を傾げたりする。

柴犬と野良犬の雑種だけどな、という部分に少し引かなかったが、白い子犬のあまりの可愛さに、すぐにどうでもいいと思った。

丸くて大きな頭、真っ白の顔に主張する黒く大きな瞳、今にもお腹が地面に付きそうなコロコロとした体。この世でいちばん可愛い犬だと思った。けいすけの

クロも可愛いが、それ以上に、雑誌やテレビに出てくるような可愛さだと思った。

「今日から毎日この子といっしょに寝る！」

真っ白の可愛いこの子犬と一瞬も離れたくない。本気でそう思った。

「これで雄一郎に兄弟ができたな」

父が目じりを下げ、白い子犬を見つめながら言った。

白い子犬は不思議そうな目で僕を見つめ、母は涙ぐみながら僕を見つめていた。

* * *

「柴犬と野良犬の雑種だけどな……」

白い子犬に「シロ」と名付けたのは、あの時すでに、けいすけの「クロ」への対抗心があったのかもしれない。とは言ってもこの対抗心は僕だけの一方通行なものだとわかっている。そしてその理由が何であるかも自分ではよくわかってい

た。

けいすけはシロをはじめて見た時も、三歳になったシロも、変わらず可愛いとたくさん撫でてくれる。けいすけのその目に嘘は感じないし、気を使っている様子もまったく感じない。きっと本音でそう思ってくれているからだ。

僕もクロのことは大好きだ。子犬の頃も可愛かったが、三歳になり、柴犬らしい柴犬に成長した。整った顔つき、バランスの良い体、綺麗な歩様、立ち姿がそれだけで絵になる。

それでももちろん、シロだって可愛いし大好きだ。ただ、小学生ながらもシロは子犬からの変化が激しかったのがわかる。

子犬の成長は人間の小学生や中学生と同じようなものらしい。だからちやうど今の僕もその過程ということなんだろう。大人の体になるために、顔や手足、体のバランスが伸びたり整ったりを繰り返し成長して、成人という完成系へと向かっていく。

シロだって一歳くらいまでは全然気にならなかった。それまではシロの成長もクロの成長も同じようなものだった。シロもクロも同じ柴犬という犬種で間違いなかった。

それが一歳を超えたあたりからだ。シロの顔が極端に縦に伸びてきた。かなり面長になってきたのだ。丸く大きかった瞳は、顔の伸びとは反比例し、キツネのような細い線になっていった。

犬の三歳はほぼ成犬の完成系だ。バランスの変化を繰り返し、完成系となったシロ。面長な輪郭のキツネ顔、それを支える細く頼りない首、メリハリがなく長すぎる寸胴な体、寸胴に対して付く四肢は異様に長く細い。まるで高床式住居を想わせるそのボディ―バランスは、もはや柴犬とは言えない。どこもかしこも基本、長い。誰がどうみても雑種だ。

「柴犬と野良犬の雑種だけだな……」

僕はいつしか、クロの柴犬らしさに嫉妬心が生まれていた。口にくそ出さない

が、クロの柴犬らしい外見がうらやましく、シロの雑種丸出しの外見を恥ずかしく思っていた。

ただ救いなのは、シロはとても賢く凛々しい犬だった。目がほぼ線なので感情の起伏はわかりづらいが、常にシュツとした表情をしている。もちろんシロ自身は、自分がキツネ顔だとバランスが悪いとか雑種丸出しとは思っていないのだから、その賢さ、凛々しさたるや、シロの内面からあふれ出るオーラのようなものだろう。

だから僕は思った。

クロへの嫉妬心はシロの賢さと凛々しさで対抗してやる。クロよりシロのほうが賢く凛々しいということを証明してやる。この嫉妬心を打ち消すにはそれしかない。

* * *

シロは警察犬より賢いかもしれない。僕は本気でそう思った。

三歳の頃から二年間、毎日散歩のたびにシロにコマンドを教えた。

「お手、おかわり、おすわり、伏せ、立て、待て、歩け、走れ、止まれ、来い、回れ」

シロはとにかく従順で、飲み込みが早く、僕から指示されることに喜びを感じている。五歳になった今、ロングリードが付いている状態ではあるが、どのコマンドもほぼ失敗はなかった。

こうなるといよいよ、次はノーリードですべてのコマンドにチャレンジしたい。シロのこの賢さを証明するにはノーリードしかない。僕の中でこのチャレンジがひとつの区切りになることはわかっていた。

ノーリードで全コマンドを成功させて、クロよりシロのほうが賢く凛々しいということを証明してやる。

「昨日クロが散歩中に、近所のドーベルマンとケンカして鼻を噛んじやって、軽いケガさせちゃったんだ」

まるで自分がドーベルマンにケガをさせたかのような悲しい顔をして、けいすけが言った。

明日から春休みがはじまるという、最後の授業を終え、けいすけと2人で下校中のことだった。

「クロはケガしなかったの?」

「うん、クロは無傷で、ケガしたのはドーベルマンだけ……」

クロは何てかっこいいんだと思った。柴犬がドーベルマンに噛み付くなんてヒーローだ。僕はクロの勇ましさに胸が熱くなった。しかし、それと同時にどす黒い嫉妬心がまた顔を出した。

* * *

ノーリードをやるなら今日しかない。

僕は家についてすぐ、居間にランドセルを投げ、軒先のシロの元に急いだ。シロは尻尾を左右に大きく振って待っていた。玄関の音で僕が帰ってきたことに気づいていたのだろう。母が顔を出さないということは買物かどこかに出かけている。今ならシロと一対一で集中してチャレンジできる。

シロの首輪に繋がる鎖をはずし、ロングリードに変え、軒先から庭に出た。

軒先の奥に広がる庭は、シロが走って遊びまわれるくらいの大きさはあり、半分が砂利で半分がコンクリートだった。

僕はシロを庭の真ん中に連れて行き、おすわりさせた。おすわりしたシロの前に、向かい合うように屈み、頭を撫でながら話かけた。

「シロ、いよいよだよ、今日チャレンジしよう、今日、シロの賢さを証明しよう」
きつね顔ではあるが、シロの凛々しくシュツとした表情はいつもと何も変わら

ない。

僕は大きく深呼吸してから、撫でている手を首輪にずらし、ロングリードの金具をはずした。

「シロ、そのまま、そのまま、待てだよ」

僕は右の手のひらをシロに向け、待ての指示を続けながら、その場から二歩三歩と後ろに下がった。シロのシュツとした表情はいつもと何も変わらない。さらに四歩五歩と下がった。

「よし、シロ、じゃーそのまま伏せしてみよう、伏せ！」

シロはおすわりの状態からその場に伏せた。

「よし、いい子だシロ、じゃあ次はそこで回ってみよう、まずは、立て！」

シロはすぐに伏せから立ち上がった。

「よし、シロ、回れ！」

シロはその場でぐるっと左に回った。

回り終わった瞬間、シロの目が一瞬泳いだ。

何とも不思議そうな表情のシロ。たぶん、回ったときに、いつものリードの引っかかりを感じなかったせいかもしれない。シロのシュツとした表情が少し崩れ、左右をきよろきよろしはじめた。

「シロ、落ち着け、待てだよ、待て」

僕は焦らず、右の手のひらをシロに向け、待ての指示を出し続ける。シロは僕の右手を気にしながらも、まだソワソワと左右に首を振るのをやめない。ハア、ハア、ハア、ハアと舌を出した呼吸のリズムもいつもより荒くなってきた。

「シロ、落ち着け、待てだよ、待て」

よく見ると、落ち着きない目が少し血走ってきているようにも見える。

僕は一旦、シロをリードにつなげて落ち着かせようと、待ての指示のまま、ゆっくりとシロに一步近づいた、その瞬間、

シロが逃げた!?

血走った目、荒い呼吸、崩れた表情、今にも転びそうな見たこともない走り方で、シロが逃げた！

シロが逃げた！ シロが逃げた！ シロが逃げた！

「……」

啞然とする僕。体が動かない。すぐシロを追いかけなくちゃいけないはずなのに、びっくりしすぎて体がまったく動かない。かろうじて動いた首をスローモーションのように回しながら、シロの後ろ姿に視線を向ける。それしかできない。シロの後ろ姿が庭の砂利を蹴り上げ、家の前の道路を勢いよく左に曲がり、消えていった。

* * *

シロの後ろ姿を見送ってからどれくらいたっただろう。それは一瞬だった気も

するが、一時間と言われたらそれくらい動けなかった気もする。

あの賢くて凛々しいシロが僕の元から逃げた。今まで一年三六五日二十四時間、常に凛々しく、シュツとした表情を崩したことはないシロ。あのシロが、今まで一度も見たことのない、感情剥き出しのおぞましく崩れた顔をして逃げていった。あの顔が意味するのは何だったのだろう。あんな顔をして逃げていく理由は何だったのだろうか。

「雄一郎、危ないからぼうっとしながら歩かないで、大丈夫だから、きっとシロは見つかるから」

母の声に我に返った。

母といっしょにシロを探し回って今日で三日目。今が春休み中なのは救いだっただ。この二日間、朝から夕方まで母とやみくもにシロを探し回った。いつもの散歩コースはもちろん、シロと少し遠出して行った公園や河原や池など、思い当たるところは二日間ですべて回った。もしかしたら、夕飯の時間になればシロはお

腹を空かせて帰ってくる可能性もあると思い、シロの夕飯の時間には家にもどつて、母といっしょに軒先で待ったが帰ってはこなかった。父も仕事の合間や夜の空いた時間に車で探し回ったり、近所の人に声をかけ、見かけたら連絡をもらえるようにと言って回った。

三日目の今日は、もう一度いつもの散歩コースを回るところからはじめた。

母と並んで歩きはじめる。

家の前の道を左に出て真っ直ぐ南に進む。二十メートルくらい進むとT字路があり、そこにカーブミラーが立っている。シロはここで必ず一回目のオシッコをする。ミラーの根元に最近おしっこをかけた形跡は感じられない。T字路は曲がらず、そのまま直進すると左側に草むらの空き地がある。シロはここで草の匂いを嗅いだり、うろうろしたりしてウンチを済ませる。恥ずかしいのかわからないが、いつも決まって高さのある草の中に隠れるようにして済ませる。無事ウンチを済ませると、後ろ足で近場の草や土をかけて隠そうとする。この草むらにも形

跡は感じられない。

また道路にもどり直進すると、大通りの十字路にあたる手前に大型スーパーがある。そのスーパーを正面入り口から入り、駐車場を斜めに抜けて、裏口から出る。裏口を出ると今度は北に向かってUターンする形で住宅街を歩く。住宅街では決まって他の散歩をしている犬と遭遇するので、犬同士も人間同士も軽い挨拶をする。シロは挨拶も上手で、自分からはあまり寄って行かないが、来るものは拒まない性格で、じゃれてくるようならそれにも付き合う。

住宅街では庭で飼われている犬もチラホラいるので、シロはポイントポイントで首を振りながら、庭に繋がれた犬たちに視線をおくる。毎回毎回、怒涛のように吠えてくる犬、小屋から出てきて、繋がれた鎖の限界まで近づいてきて遊ぼうと誘ってくる犬、そっけなく寝そべったまま視線だけでシロを見る犬。シロはクールだからどの犬に対しても表情ひとつ変えず、五秒くらい見つめたあと、また前を向き歩き出す。その姿は、この住宅街の庭で飼われている犬の点呼を毎

日とっている係員の存在のように思えてくる。

そんなシロも、住宅街を抜ける最後の十字路を左に曲がる所からソワソワして足取りが軽くなる。曲がって真っ直ぐ進むと、最初のカーブミラーのT字路にもどるのだが、その途中にけいすけの家があり、庭にはクロが繋がれている。

けいすけの家の入り口には黒い鉄格子の大きな門があり、格子と格子の間が十センチ間隔で空いているのでシロからもクロがよく見える。シロはクロが大好きなのか、この時ばかりは格子の隙間に鼻を押し込み、クロに少しでも近づこうとする。クロも鎖の限界まで門に近づきシロを見つめる。昔なじみのシロとクロ。お互い見つめ合うその姿は微笑ましいし、どこかせつない。次のT字路を右に曲がればその日の散歩は終わる。

母と並んで住宅街に入った。シロは連れていない。いつも怒涛のように吠える犬も、遊ぼうと誘ってくる犬も、寝そべったままの犬も視線すら合わせてこな

い。僕はその姿を見ながら、お前たちシロを見かけなかった？と心で尋ねてみる。もちろん何の返答もない。

シロはこの二日間どうやって過ごしているのだろう。ご飯はどうしているのだろうか。お水はどうしているのだろう。先の見えない空虚感が胸に広がり、それを埋めようと母の顔を覗く。さすがに三日目にもなると母の顔も少し疲れていた。

「お母さん、こんなことになってほんとにごめんね……」

自然と言葉が口をついて出た。母は一瞬おどろいた表情を見せたが、すぐに笑顔を向けた。

「雄一郎は何にも悪くないから大丈夫よ、シロだって何にも悪くないわ」

「……お母さんは、何でシロが逃げちゃったと思ってる？」

「シロは逃げちゃったつもりはないと思うよ、うん、なんていうか、雄一郎がいつも読んでる漫画あるじゃない？」

「少年ジャンプのこと？」

「そう、あの漫画にも犬の物語あるじゃない?」
「銀牙のこと?」

「そう、それ。あの銀牙って犬の冒険のお話なんでしょ? それと同じで、シロもちよっと冒険したくなっただんじやないかな?」

「ええ!? じゃ、じゃあ、シロは、シロは、赤カブトを倒すために、銀やクロス、ベンたちと男を磨く旅に……」

「いや、そういうことじゃなくて、ちよっと外の世界もいろいろ見たくてひとりでお散歩に行ってるってこと」

「わかってるよ、あれは漫画だもん、それにもし銀といっしょに旅に出たら、シロが傷だらけでボロボロになっちゃうよ」

「え? そうなの? あの漫画はそういう内容なの?」

僕は少し笑った。母もつられて笑った。

なんだか母の笑顔を見たのは久しぶりだった。久しぶりの母の笑顔の奥にシロ

が見えた。

シロが見えた? ん?

住宅街を抜ける最後の十字路を左に曲がり、けいすけの家の門の前を通り過ぎるときだった。

「お母さん! シロがいる!」

僕は黒い鉄格子に両手をかけ、隙間からクロの後ろに見えるシロを発見した。

母も僕の隣に並び、鉄格子に両手をかけ、隙間からクロとシロを見つめた。

シロがいた! シロがいた! シロがいた!

急激に胸が高鳴った。鉄格子の向こう、七、八メートル先にシロがいる!

シロはクロと遊んでいるのだろうか?

シロは、クロの後ろからお尻に前足を両方乗せ、自分は後ろ足だけで立った状態。腰を前後にカクカク動かしている。こちらからは立ち上がったシロの後ろ姿と、クロの後頭部が少し見えるだけだ。

「シロ、シロ、」

僕は大きな声にならないように、びっくりして逃げてしまわないように、シロの背中に優しく声をかけた。しかしシロは僕の声など全く聞こえない様子で、必死にクロの後ろで腰をカクカク動かしている。

「お母さん、シロは何してるの？ どうしよう、どうしよう」

やっと見つけたシロに動揺しているのだろう。母の横顔はあきらかに引きつっている。

「とにかく、インターフォン押して門を開けてもらいましょう」

「でも、したらシロがまた逃げちゃうんじゃない？」

「でも、このままじゃどうにもできないし……」

「何とかシロをこっちに呼んでさ、近くにきたら隙間から手を入れて首輪を掴んで抑えよう！」

「そっか、そうね、それからインターフォン鳴らして、けいすけくんか、お母さ

んに出て来てもらうのがいいか……」

その間もシロの腰のカクカクは止まらない。少し距離はあるがシロもクロも呼吸が荒いのが伝わってくる。

「シロー！ シロー！ こっちだよシロー！」

するとシロではなく、クロが反応して体を横に向け、首だけでこちらを見た。それに合わせてシロも後ろ足を上手に横にスライドさせ、立ったまま、腰をカクカクしたままの状態をキープする。クロとシロが横向きになった。

久しぶりにみるシロの横顔。その眼球は血走り突き出している。呼吸は荒く、長い舌を激しく振動させ、涎を垂らしている。血走った眼球はクロの後頭部辺りを見つめ、クロのお尻をめがけ前後する腰、腰のリズムに合わせて前後するシロの下腹部。それはまるで、飛び出した臓器のように赤黒く、今にもはちきれんばかりにパンパンに膨張した、パンパンに膨張した？ 膨張した……

「!?!」

「何やってんだシロおおおおお！」

あまりの僕の大声に、シロが腰の動きを止めた。

スローモーションのようにゆっくり首を回し、顔だけこちらに向ける。格子の隙間越しにシロと僕の目があった。

シロが、はっ！とした顔をした。一瞬の間があり、目線をそらした。またスローモーションのようにゆっくり首を回し、視線をクロの後頭部に戻した。腰が再始動した。

「シロおおおおお！ シロおおおおお！ シロおおおおお！」

絶叫、悲鳴、嗚咽、頭の中で大きな警報機が鳴り響く。隣で母も同じように叫んでいるのはわかるが、頭の中の警報機がうるさくて何を言っているのかわからない。

「ダメだシロおおおおお！ ダメだシロおおおおお！」

もはやシロは全くこちらを向かない。それどころか、さらに腰の動きがピーク

を迎える。

「ダメだシロおおおおお！ クロはああああ！ クロはああああ！」

シロはまさに今、果てようとしている。

「クロはオスだよおおおおお！」

* * *

桜の花びらをワイパーに挟んだ、父のワンボックスカーが駐車場に入ってきた。父がシロをこの家にはじめて連れ帰った十年前のあの日と重なった。

「シロ！ お父さんが帰ってきたよ！ 帰ってきたから大丈夫だよ！」

僕も母もわかっている。きつと父がシロの元に来た瞬間、シロは父の姿を確認した瞬間、目を閉じることを。

「シロ！ 頑張れ！ シロ！ 頑張れ！ もう少しだから頑張れ！」

僕と母は必死にシロの想いをつなぎとめる。いつもの紺色のつなぎを着た父が運転席から降り、小走りでシロと僕たちの元に来た。

シロの目はうつろなまま、父の姿に焦点を合わせ、目を大きく見開いた。

「シロ！　ありがとう！　シロ！　今までありがとう！　今までありがとう！」

母からの電話で、すでにシロの容態は理解していたのだろう、父がとっさにシロに最後の言葉をかける。父の言葉に、いよいよシロの最後を迎えるこの瞬間に、僕と母は泣きじゃくるだけで声が一切でなくなつた。父のようにシロにありがとうを伝えたいが、呼吸すら上手くできず、声が出ない。

シロが、今、この瞬間、死ぬ。シロが、今、この瞬間をもって、もう二度と会えない存在となる。シロが、今、この瞬間、と想いを繰り返した。繰り返した。繰り返した。

三十分以上が経った。シロはまだ生きている。

さすがに僕も母も途中から泣きながらも声は出ていたので、

「シロ！　ありがとう！　シロ！　今までありがとう！　シロ！　今までありがとう！」

三十分以上、三人で連呼していた。

だがシロはなかなか死なない。

もちろん、シロには死んでほしくないのだが、誰がどうみても、一〇〇人が一〇〇人、今がシロの死期だとわかる。僕も母も、シロは父の帰りを待つという気力だけで生きていると思っていたから……。

「！」

僕はその場から立ち上がり走った、走った、走った、走った、インターフォンをならし、事情を伝え、抱きかかえ、また家にもどる。

「シロ！　クロだよ！　クロを連れてきたよ！」

僕は抱いたクロの顔をシロに近づける。

シロの目はうつろなまま、クロの姿に焦点を合わせ、目を大きく見開いた。シ

ロとクロが目を合わせた。

シロの目は何かを話していた。クロの目は何かを聞いていた。
しばらくして話し終わったのだろう。

シロはゆっくり目を閉じた。